「共同研究　転向」と鶴見俊輔

土　倉　莞　爾

目　　次

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　「共同研究　転向」のモチーフ
Ⅲ　「共同研究　転向」研究会の発展と展開
Ⅳ　転向の遺産
Ⅴ　おわりに
参考文献

Ⅰ　はじめに

鶴見俊輔が主導した「共同研究　転向」研究会という団体が成し遂げた成果は非常に大きなものをもっている。その提起された問題を解明したいというのが本稿の目的である。

Ⅱ「共同研究　転向」のモチーフ，においては，1954年の研究会の立ち上がりから，歴史的にたどりながら，「転向研究」の意義を探ろうとした。

Ⅲ「共同研究　転向」研究会の発展と展開，においては，「鶴見の転向研究は，それ自体，現代日本の思想史を構成する貴重な内容になっている」と主張する高畠通敏の言説を中心に論じてみた。

Ⅳ転向の遺産，においては，戦後転向の問題を，清水幾太郎と西部邁をケーススタディとして検討した。

Ⅱ　「共同研究　転向」のモチーフ

鶴見俊輔著『期待と回想』上・下巻（鶴見，1997a，b）は，評論家北沢恒彦，松下電器副参事小笠原信夫，経済学者塩沢由典が聞き手となって，鶴見に質問

し，鶴見がそれに答えるという座談会形式になっている著書であるが，その第４章「転向について」は，「共同研究　転向」のモチーフをよく物語っている。抜粋的に内容を紹介しながら，さっそく問題に入ってゆきたい。

鶴見さんの呼びかけで「転向研究会」が1954年にはじまって，その成果が『共同研究　転向』全３巻として平凡社から刊行されています。上巻が1959年，中巻が60年，下巻が62年。（中略）ほぼ10年がかりの大研究だったわけですね。

転向というテーマは，1942年から私の中にあるんです。ヒントは帰国後手に入れた評論家手帖です。戦後，それに手をつけようと思ったらバーッと膨れてきて，自分個人のものじゃなく，「転向研究会」の共同研究というかたちになった。20年間，自分の中にあったテーマなんです。

1942年といえば鶴見さんが日本に帰ってきた年でしょう。そのとき転向というテーマが一挙に見えてきたんですか。

そうです。全部，パッと見えてきた。それは自分の内部を通しているから。私はアメリカにいるときは日本はすぐに負けると思っていた。科学的な判断じゃないんです。負けるとき日本にいなければ，自分に対しての自分の存在感がなくなると思った。ところが日本へ帰ってきたらなかなか負けないんだな，これが（笑）。自分もずるずるとジャワに行って，反戦の意志をいかなるかたちでも表現できなかった。「ああ，おれもずりおちたな」という自覚があった。（中略）

アメリカから帰ってきたら，軍国時代の言論の指導者が大正時代の平和主義の指導者と同じだった。このことはナチスドイツでも同じように起こったのか。ムッソリーニのイタリアではどうなのか。さかのぼってローマ皇帝がキリスト教を受け入れたときはどうだったのか。権力と正義が一致したという錯覚をもったとき，知識人はどうなるのか。それを全体として記述していく新しい枠を見つけたと思った。人間の思想史を書くキー概念ができたと思った。それはアメリカで勉強しているときの私には思いも及ばなかったヴィジョンだったん

です（鶴見 1997a，179-80）。

たしかに『戦時期日本の精神史』（鶴見，1982）は，日本近代史を踏まえた巨視的な転向論になっていますね。時代の先が見えない中で開国に踏み切った幕末の思想の生産性に高い評価を与える。明治の２代目もそのことを自覚して欧米の植民地にならないよう国家のかたちをつくってゆく。ところが日露戦争（1904年）のあと，日本の指導者層は東京帝国大学の卒業生によって占められるようになった。日本マルクス主義の草創期をつくった東大新人会の若い知識人たちの思想と，その後の彼らの転向を考えるうえでも，先の切れ目が重要なポイントになるというわけですね。1942年に見つけた転向というテーマを戦後につなげてやってみたいと思ったとき，最初はどういう考えをもってらしたんですか。

大正，昭和の日本史の記述には，「こういうふうにしなければいけない」という理想主義を基準にして，そこでだけ思想史を記述するという考え方がありました。だから「野呂栄太郎はえらい」「小林多喜二はえらい」というトップのところだけで見ていく。しかし，それとはちがう仕方で，はじめから「非転向だけがえらい」という立場を取るのではなく，「転向」によって見えてくる重大なものがあるだろうと思った。それが最初の考えなんです（鶴見 同，181-2）。

鶴見は話し続ける。その線上で考えたら，（中略）「非転向はいい，転向は悪い」という区分けだけでは見えないものがあるんです。その中で偉大だと私に思えたのは埴谷雄高です。戦後でいえば『戦艦大和ノ最期』の吉田満です。ともかく「非転向だけがえらい」という考え方から戦中に離れていたことはたしかなんです。（中略）。

私は葦津珍彦に非常に感心しているんです。葦津さんというのは市井三郎が『思想の科学』に連れて来た人で，1992年に亡くなったんですけど，亡くなる前に私にいいたいといって京都に来た。「私は敗戦のとき，これからは天皇の弁護人になろうと思った。弁護人は被告のいいところばかりではなく，悪いと

ころもちゃんと知っている。しかし表だって活動するときには被告の悪いところはいわない。そのことを理解してくれ」それだけをいいに，老齢だったんですが京都まで来たんです。（中略）葦津さんに対して私が及ばないと思うのは，葦津さんは日本民族を愛しているんですね。（中略）戦争中，彼は当時の東条内閣を批判して牢屋に入っている。そして戦後は『神社新報』で占領批判をやった。（中略）そういうことが見えてくると，転向論だってもっと複雑なものになりますよ。市井三郎が葦津さんを連れてきたことは私にとってたいへんよかった。

もう一人は林達夫です。戦争中も立派だったんですが，戦後，『共産主義的人間』（林，1951）を書いて，ソヴィエト・ロシアの国家としての行き方を完全に否定した。スターリンが「日露戦争に対する報復を自分たちがやった」とメッセージを出したでしょ。びっくりして，そこから書きはじめている。林達夫の共産主義の見方はたいへんすぐれていた。

もっと若い人でいえば，戦後50年の活動を見てきて，吉本隆明はすぐれた人だと思いますね。ことにかれが数年前に書いた『甦るヴェイユ』（吉本，2021）というのはいい本だと思う。吉本にとってシモーヌ・ヴェーユという気質のあい入れない人に託して，マルクス主義とスターリン主義の不備を語った。

ヴェーユは23歳のときドイツに行って，「ナチスに対して共産党は鈍感だ」とドイツ共産党に対して疑いをもつ。自分で工員になって工場で過ごす。（中略）彼女は肉体労働は社会生活の霊的中心でなければならない，と考えた。それなのにイデオロギストは，自分は何者でもないのに人を見下して与太話をする。その瞬間から一切の信仰は滅亡に向かう。もしスターリンが与太話のかわりに自宅で皿洗いをしたならば別の境涯がひらける。

吉本隆明はこのヴェーユに託して，ソヴィエト・ロシアは与太話をした国だといってるんです。ヴェーユの無神論は浄化作用である。神の体験をもたない２人の人間がいるとする。神を否定する人の方が，おそらく神により近い。これがヴェーユの直感です。「与太話なにものぞ」という考えですね。ここから吉本は，純正のマルクス主義にもどれば全部よくなるという主張はソヴィエト

の崩壊批判として十分でない，というテーゼを出した。ヴェーユを語り直すことによって自分の位置を明らかにするんです（182-5）。

この世代では，もう一人，森崎和江にも感心しました。『慶州は母の呼び声――わが原郷――』（森崎，1984）という本。彼女のお父さんは朝鮮の学校の教師で，朝鮮がとても好きだった。しかし植民地支配の手先となって活動した事実は消えない。戦後，彼女の弟は自殺している。彼女にとっては非常な傷だった。そのときから，自分の故郷は慶州にある，それでいいんだと考えるようになった。自分を無謬の立場，あやまりのない立場において思想を語る立場を捨てるんです。自分には朝鮮に対する好意と懐かしさがある。だが，自分は植民地支配の手先であるという事実も捨てない。戦後の進歩的知識人の運動に後めたさを感じながら，自分はそこからやるほかないという考え。森崎和江が書いた50冊近い本は大したものだと私（鶴見）には思える（185）。

ここで，筆者（土倉）のコメントというつもりで，『慶州は母の呼び声――わが原郷――』のあとがきの一部を引用させていただきたい。森崎はこう書いている。

「朝鮮語では母親のことをオモニという。わたしという子どもの心にうつっていた朝鮮は，オモニの世界だったろう。個人の家庭というものは広い世界の中に咲く花みたいなもので，世界は空や木や風のほかに，沢山の朝鮮人が生きて日本人とまじわっているところなのだと，そんなぐあいに感じていたわたしは，常々，見知らぬオモニたちに守られている思いがあった」（森崎 1984，224-5）。

森崎和江は，2022年６月18日死去した。以下，『朝日新聞』デジタル記事から一部分引用しておきたい。

詩人でノンフィクション作家の森崎和江さんが15日，急性呼吸不全で死去した。95歳だった。葬儀は18日に近親者で営んだ。旧朝鮮・大邱府生まれ。敗戦直前に17歳で単身日本に帰国した。旧福岡県立女子専門学校（現・福岡女子大）卒業。詩誌「母音」の同人を経て1958年，筑豊の炭鉱町に転居し，谷川雁，上野英信らと「サークル村」を創刊した。同誌には石牟礼道子も参加した。女

性の交流誌「無名通信」を主宰した（https://search.yahoo.co.jp/search?ei=UTF-8&fr=mcafeess1&p；2022年７月１日閲覧）。

ここで，筆者（土倉）の私見を挟めば，森崎が植民地時代の朝鮮で育ったことが重要である。森崎はそのことを忘れず，いわば，自己批判を原点として，サークル運動や文筆活動において，活躍した。鶴見は，それを大事な「戦後転向」として絶賛する。非常に幅の広い深い「転向論」だと思う。

福本和夫については『共同研究　転向』の中でも触れられていますね。いま福本についてコメントしなおすとしたら，どういうことになりますか。

スターリン主義はスターリンだけに責めを負わせることはできない。「福本イズム」というのは福本和夫だけに責めを負わせることはできないんです。明治末から大正にかけてできあがった東京帝国大学を頂点とする日本の知識人の養成課程があって，それが福本がいったことを「これだけが正しい」と思わせる原因になった。フランクフルト学派でいえば，ベンヤミンもアドルノもスターリンの共産主義に対しては批判的だった。もし福本が日本共産党の重要人物になっていなかったら，そういう道をひらく可能性はあったでしょうね。私はいまだったらもう少し慎重に，福本自身のいいぶん，根拠をとらえるようにしたと思います（187）。

鶴見さんの中には，転向しなかった人はえらいという感じがありますでしょう。

あります。桑原武夫さんは，戦時中，獄中共産党員に対する引け目がなかったみたいですね。同時に，獄外にいて活動した尾崎秀実のような人に対する引け目もあります。桑原さんと松田道雄さんは京都一中で同じ時期に中学生だったことがあるんです。ただし３年ほど差があって，松田さんには共産党に対するコンプレックスがある。日高六郎と私（鶴見）の関係がそうです。日高さんは私より５つ上です。日高さんが中学生になったころは，まだ『資本主義発達史講座』が古本屋で買えた。ところが私のころにはもうなかった。大杉栄は買

えたんですよ。大杉栄訳の『クロポトキン自伝』は買って読んだ。この本が偶然，アメリカへ行く前に，私をマルクス主義に対して免疫にしたんです。アメリカで会った都留重人はある意味でマルクス主義者でした。南博もそうです。この２人から多くを教わりましたが，私の立場は動かなかった。

> 丸山眞男さんが（中略）ちょっとした時代のずれが大きな差を生むことの例として桑原武夫さんを挙げています。「私は丸山さんとちがってマルクス主義者に対するコンプレックスがまったくない」と桑原さんが言ったことに対して，丸山さんが感嘆の声をあげている。その丸山さんはまた，「共産党には戦争を防げなかったことに対する政治的自覚がない」と正面から批判を放ったひとでもあった。

戦後の日本共産党の最大のミステークですね。そこから回復できない。いまもむずかしいでしょう（187-9）。

私は戦前から，マルクス主義はキリスト教の新形態だと思っていた。マルクスもレーニンも，あまりにもキリスト教的だと思っている。実践的なキリスト教の一形態としてのマルクス主義に対しては脱帽しますけど，マルクス主義の考え方は，どうしても，「真理はここにある，これを信じなさい，まだわからんのか」と，頭をボカッとぶん殴る方向に行くんです。それは具合が悪い。マルクス主義者たちは自分たちが犯したまちがいがどういうものであったかを認めて，そこから真理の方向を探るというのがいいんだけど，なかなか敗退を認めないんだな。

その点，吉本はきわめて巧妙な方法を取ったと思うね。ヴェーユなんてとんでもないものを出して，ヴェーユについての感想というかたちで書いた。彼は護教的じゃないんだ。「マルクスにもこんないいところがある」なんて論文を書いていないからね（196）。

> 吉田満については，鶴見さんが言われたように，あやまりの極限まで示す。失敗をいさぎよく示すことが失敗者の義務なのかもしれません。

吉田満は戦艦大和の最年少の士官だったんだけど，戦後，もう一つの“戦艦大和”に乗った。日本銀行に勤めて，最後は監事になる。日銀の歴史を書く総元締になって，「とてもうれしい」といった。吉田満は，「あの戦争が起こったとき成人に達していた者には，それぞれの経験をカードに書き出しておく任務がある」と考えていた。われわれはどこでまちがったか。そのとき大人であった者はだれしも責任を逃れることはできないという考え方なんです。戦艦大和の士官としてもっていた責任概念を，日本銀行の中でも捨てていなかった。ものすごくえらい人だった。かれは死ぬ半年前に，文藝春秋社の『諸君』（1978年８月号）で私を対談相手に指定したんだ。その対談が終ったあと私はカナダへ行ったんだけど，モントリオールの総領事館でひと月遅れの新聞を読んだら，死んでいるんだよ。終わりまで立派な人だったと思うね。「われらの世代の最良の人」というのが吉田満に対して私がもっている正直な感じだな（196-7）。

> 転向したことによっていかに次の可能性をめざしたか。鶴見さんの転向論でいうと，埴谷雄高は転向によって水晶玉の方向を見つけだしたということになる。（後略）。

文学で考えれば，中野重治の転向もある種の知的生産になった。『むらぎも』（中野，1960）は偉大な作品だと思いますが，あれも転向なくしては書けなかった。文学は日本では千年の伝統があるから練れているんですよ。日本の社会科学は歴史が浅いから，転向体験を自分の肥やしにして何かをつくるということがむずかしい。

例外はあるんです。その一人が佐久病院院長の若月俊一です。かれは東大生だったとき捕まる。教授の温情主義のおかげでその後も医局に勤めるんだけど，戦争中，そこを離れて長野県の佐久に行くでしょ。そのきっかけになったのは島木健作の『生活の探求』（1937年；1955年）です。（中略）若月にとっては『生活の探求』は重大な目標になる。ひたむきに生きたいと，村の老人のさまざまな病気に対処する方法を考えるんですよ。戦争が終わって東京に帰るチャンスがあったのに帰らない。佐久に農村病のセンターをつくる。その病院を左翼が

乗っ取ろうとしたとき，土地の病人本位ということで，それに立ち向かうんです。かれは転向が生み出したすぐれた例じゃないかな。

その意味では松田道雄もそうだと思う。自分の仲間が検挙されて殺されたりして，松田さんには，自分はそういう人に対して及ばないというコンプレックスがあった。そして自分は京都府庁に勤めて結核多発地域の地図をつくった。戦争中は，夫人が速記を勉強して，自分もロシア語を勉強する。だけど共産党員にはならない。シンパとしてのポジションにいつづけるんだけど，怖いから深入りしない。（中略）。

転向を広い意味でとれば，松田道雄の転向はたいへん生産的だった。あれだけのロシア思想史は大学の教授や助教授からは出てこなかった。それを継ぐのは和田春樹だね。ロシア史をやっているにもかかわらず共産党と一体化しなかった。

人間の思想，個人の思想はつねに権力による強制力の外に出られない。それとどういうふうにやりとりしていくかが必要になる。その意味では転向研究はもう終わった問題じゃないんです。人間がつづけて担っていかなければいけない。だけど，共産党が正しい思想の座であって，そこからどのくらい離れたかで転向度を測るというのは，もはや荒唐無稽だな。そうではなく，人間としてもっている深い問題から目を逸らすかどうか。ここでしょ（197–9）。

> 近衛文麿の「偽装転向」とダブらせて思うんですが，鶴見さんのお父さん，鶴見祐輔は知米派の大立者として戦前から戦中の政界に立ちつづけた。非転向でいるためにいちばんいいのは目立たないところにいることですが，鶴見祐輔はそうではなかった。かれの転向もまた偽装転向の一種だったんじゃないでしょうか。

親父のことを書きたくなかったから，あそこで永井柳太郎と近衛文麿について書いたんですよ。私はずるいんだよ。

私は永井道雄の話を聞いて私の親父よりも永井柳太郎の方がえらいなと思ったね。「自分の生涯は失敗だった。なにもいいのこすことはない」といって死

んだ。えらいと思う。永井道雄が武蔵高校３年のとき，「来年どうするつもりですか？」と息子に聞く。「東大に行こうかと思います」「それはよくありません」。そのとき永井道雄は，親父が何をしてほしいと思っているかわかったというんだ。早稲田に行ってほしい。でも旧制高校を卒業して早稲田に行くのは変則なんだ。「じゃ，京大に行きます」「京都大学ならよろしい」と。私の親父とはちがうなと思った。親父は，東大卒業以外，認めないんだから。

私は，（中略）親父が私に残したものについては考えたくないし，いいたくない。ほとんど書いたことがない。そのかわりに，永井柳太郎と近衛文麿について書いた。『転向』３巻は，じつは私の親父についての感想なんだ。共産党の転向は私のおもな研究対象ではない。ただ『共同研究　転向』の下巻に略伝としては親父を入れています。それは私が書いた（217-8）。

以上で，長々とした鶴見『期待と回想』上巻からの引用というか，抜粋は終わりにしたい。ところで，意図的というか偶然というか，この話は，形を変えて，鶴見ほかの鼎談形式の別の著書（鶴見ほか，2004）に引き継がれている。臆せず，その著書からの引用を続けたい。

小熊　それでは，『転向』の共同研究についておうかがいしましょう。あの共同研究は，1954年から開始されて，62年までに上中下３巻にわたる大冊の共著として世に出ることになる。その前に，研究のもとになったお父さんの祐輔さんのことをおうかがいしたいと思います。（中略）祐輔さんは，追放解除になるのにずいぶんお金を使ったと思うということでしたね。祐輔さんはそれで喜んで，もう１回政界に進出しようという感じだったのでしょうか。

鶴見　そう。彼は能天気だからねえ。

小熊　『期待と回想』（鶴見，1997a）のインタビューでは，「『転向』３巻は，じつは私の親父についての感想なんだ」と述べておられますね。（後略）。

鶴見　だいたい親父は，「総理大臣になりたい」とか言っていたんだけれど，なって何をやりたいのって聞いても，なにも出てこないんだから。日本の政治家の大部分というのはそういうものじゃないの。国連の常任理事国になりたいとかいうけれど，なって何をやりたいのかといえば，誰もなにも言わな

いじゃない。あれを見ていると，親父を思い出すんだ（笑）。ただ一番になりたいだけなんだよ（鶴見・上野・小熊 2004,239-40）。

鶴見　戦争中に親父は翼賛議会で旗を振った。彼はもう軍隊に召集なんかされない年齢で，しかも偉いところにいるから，勝手なことを言えるし，自分の言ったことをひっくり返すこともできる。そういう人が追放解除になって，軍隊の末端で残酷なことをさせられた人間だけが，戦犯として追及されるというのは変だと思った。

鶴見　私は戦犯裁判には協力しなかったけれど，親父は追放されるべきだったと思っている。それは撤回しない。そういうところは，和子と私じゃ分かれちゃうんだ。和子は「父の娘」ですからね。親父をできるだけいい方に解釈して一所懸命に動いちゃうんだよ。私は逆回りだ（鶴見・上野・小熊 同，241）。

小熊　『転向』３巻の共同執筆者の中で，印象に残っているのは誰ですか。

鶴見　まず藤田省三は，研究者としての自分の最良の時期を『転向』３巻に注いでくれた。それはとくに言っておきたい。そのほかの寄稿で，倫理的精神が貫かれていると思うのは，高畠通敏の大河内一男論だな。高畠は，当時は東大法学部の助手だったんだよ。それが，たった20年くらい前の十五年戦争の時代の，先輩の知識人の過去を書くということは，大学の世界の中では大変なことなんだ。大河内さんはそのあと東大の総長になった人なんだからそんな人を批判する論文を書いたら，もう東大の教授にはなれない（243）。

Ⅲ　「共同研究　転向」研究会の発展と展開

『鶴見俊輔著作集』２（鶴見，1975a）には，以下，これから述べるように，「転向研究を主体とする鶴見俊輔の現代日本分析のエッセイが収められている」（高畠 1975，477）。

ところで，この鶴見著作集のこの第２巻の「解説」を担当しているのは，政治学者の故高畠通敏であるが，素晴らしい「解説」になっている。高畠は次のように述べる。

この巻に収められているエッセイのほとんどが思想家論の形をとっているか

ら，見方をかえれば，これは，思想家論集という形をとった，鶴見俊輔による昭和思想史ということもできるだろう。昭和思想史の表舞台は，超国家主義からマルクス主義にいたるまでの華やかなイデオロギー論争で形づくられている。しかし，その真の主題は，天皇制体制と民主主義国による占領という２つの思想的権力にはさまれた知識人の挫折と転向をめぐるドラマである――これが，鶴見が昭和思想史に対して打ちたてた軸だった。このテーゼ自体は，必ずしも鶴見ひとりの独創とするわけにはゆかない。（中略）しかし，鶴見の転向研究の視角は，（中略）前世代・同世代の人びとのいずれとも異なっていた。また，その仕事の包括性，組織性は，他のいずれをもはるかに抜きんでていた。実際，転向という問題が，それまでのような政治的あるいは文学的な問題としての域をこえて，現代日本の思想を分析するさいに欠くことのできない思想的カテゴリーであるということが，一般に承認されるようになったのは，鶴見が組織した共同研究『転向』全３巻（思想の科学研究会編 1959，60，62）が出版された後であるといってもいい過ぎではないだろう（高畠 1975，477）。高畠の鶴見による「転向研究」に向けての熱弁は，まだまだ続く。引用を続けたい。

高畠は言う。転向の研究こそ，鶴見が戦争中に戦後の日本を切りひらくべく密かに計画をたてた「矢玉」の中でもとっておきのものだったからだ。その意味で，鶴見の転向研究は，単に現代日本思想史のユニークな分析としてばかりでなく，戦争体験をふまえて戦後日本の社会を切りひらこうとした“戦中派”世代の最高の知的達成の一つとして，それ自体，現代日本の思想史を構成する貴重な内容になっているのである。（中略）転向の研究はほぼ完全に鶴見の構想とリーダーシップに負っており，私（高畠）のような戦後派若手メンバーは，鶴見の意見にあらがい論争しつつ，いつしかその網の目にからめとられるというのが実際のところだった（同，478）。

高畠は続ける。一つの創造的仕事が決定的な影響を及ぼすということは，たとえばバーリンがマルクスの仕事について指摘しているように，同時代にきびしく批評された諸テーゼが後の時代において常識とみなされるようになるのだとしたら，鶴見が転向研究で提出した諸テーゼも，これに近いものといいえよ

う。

彼（鶴見）はここで，転向の概念を日本の昭和８（1933）年以後のいわゆる「転向時代」から切りはなし，また転向ということを左翼からの〈堕落〉や〈裏切り〉と等置する見方に反対して，日本の思想史全体をつらぬき，ひいては世界の思想史にもおよぶ普遍的かつニュートラルなカテゴリーとして，転向を意味づけることに全力を傾けた。やがてスターリン批判や中ソ論争の余波が日本のなかで拡がり，新左翼運動が多様に展開するなかで，日本の知識人にとっても，たとえば日本共産党からの転向が多様な方向性をもち，倫理的堕落と必ずしもイコールではないという問題が，一般的に見えてくるようになる。（中略）この意味で，国際的な視野の下に日本をさかのぼるという鶴見の視座は，戦後のつぎの時代へ向かっての予見性を帯びていた。しかし，それは提出されたその時点では，ほとんど圧倒的な批判にさらされたのである。古傷をさかなでするような研究は止めるべきだという左翼からの政治主義的反撥は，もちろん強かった。60年安保当時のブント系の学生たちが，代々木共産党攻撃の材料として『思想の科学』の転向研究を利用していたから，こういう反撥は必ずしも無根のものではなかった。しかし，それにもまして，転向の概念をイデオロギーや価値判断と切り離して用いるという鶴見のテーゼが，思想や倫理についての「相対主義」「没価値主義」として，進歩的知識人たちのはげしい批判をまねいた。たとえば，古在由重は，転向とは「再否定 renegation」つまり正しい階級的立場にいったん立った人間が支配権力の立場に移る「背教」現象に限定して用いられるべきで，戦後，階級的戦列に＜目覚めて＞加わることをも転向という概念でくくることにはげしく異議を唱えた。共産党の立場がすなわち正しい階級的立場であるということを留保する本田秋五でさえ，「転向前と転向後，どちらが正しいか，という観点」がかけている「倫理からの脱色」を伴った研究方法に疑問を呈した（479-80）。

高畠はさらに議論を展開する。すなわち，高畠によれば，転向研究の方法は，しばしばプラグマティズムによる相対主義，没価値的な実証主義から由来するものとみなされてきた。（中略）しかし，転向の方法論の中で鶴見がくり返し

ふれているように，思想は気質とひびきあう。とすれば，彼に接した人間が誰でも感じるように，ひと一倍情念の強い躁鬱気質の鶴見が冷徹な自己抑制と無機的な資料操作を必要とするウェーバー的な了解科学や近代主義的な実証科学の道を追うはずがないと考えるのが自然である。（中略）。

まだ定稿となるまえの鶴見の方法論をききながら，ある日，私（高畠）が転向についての〈雄大な〉理論モデルを用意してサークルにあらわれたときのことをありありと記憶している。それは，鶴見があげる転向の類型学の諸要因，状況・階層・気質・強制力の種類・イデオロギー等を組み合わせつつ，ひとはいかなる要因の組み合わせにより，いかなる転向をするかを説明しようというものだった。しかし，私の話をきき終わった鶴見はにべもなく，「そんなパチンコの玉の落ち方の理論みたいなものに意味はない」と一蹴し去ったものだ。転向学を打ち立てようという鶴見にとって究極的に意味をもたせられていたのは，明らかに〈例外〉的にはみだす個々の玉の内実なのであって，玉の落ち方の実証的な一般理論でもなければ，クギの配列の仕方についての構造的了解でもなかったのである。（中略）。

彼（鶴見）にとって転向学は他面，同時に思想史であり，それはすなわち思想家研究の集積として最もよく表現されたのだ（480-1）。

高畠は言う。戦後日本の知的世界の中で，鶴見の仕事が多くの知識人に意表をつかれたようなショックをあたえ，当事者たちからさまざまな反撥を招きつつ，しかし，いつしか後の世代に水のしみこむような浸透力を発揮したのは，（中略）彼の方法論の成果だといってよいだろう。歴史的文脈をバラバラに解体し，時には故意に無視しながら，彼は後代が生かしうるさまざまな芽や部分をすくい上げ，それを大写しにしてみせる（483）。

高畠によれば，公人と民衆，これが鶴見が政治の世界で区別する人間のあり方だという。すなわち，公人は，自分が公けにのべたことに責任をもつ。この「けじめ」の感覚こそが，政治の世界の最高のモデルである。政治家に問うべきものは，まず公人としての「正札」責任であるという思想は，丸山眞男の「指導者の政治責任」の問い方とは異質であり，また，吉本隆明における「知

識人と大衆」という対比の仕方とも異質である。丸山においては，指導者ののべたことではなく，なしたことが大切なのである。そして，吉本においては，そもそも知識人が大衆から上向的に脱出して指導者になる過程が，転向に他ならない。大衆自体とはつねに「ウルトラ」な存在であって，体制にも反体制にもべったり突出型に行動し，そこには，転向という問題のたてようがない。しかし，鶴見においては知識人と大衆，いや公人と民衆との間には，本来的な切れ目がない。大衆も思想主体であり，知識人も大衆的な欲望や実感の世界を内側にかかえている。両者はいわば役割の差であり，社会的制度によってとる機能のちがいの問題なのである（484）。

「（問題は）私的体験から公的原理へ，公的原理から私的体験へのつながりをつくりだす交流操作をつむことにあり，（民衆の）転向の問題を解いてゆく思想上の方法としては，このように両極間の往復運動を活発にすることが目標とされる」（鶴見1975b，27；高畠1975，484）。

高畠によれば，鶴見がこう書いた次の年の1960年安保闘争で，吉本がブントの学生大衆とものいわずに国会内に突入したとき，鶴見が「声なき声」の民衆とともにデモをし声をあげた根拠を（中略）ここに読みこむことができるだろう（高畠1975，484）。

高畠は言う。鶴見と吉本のもっと根本的な位相のズレは，両者の政治哲学の中にひそんでいる。それは鶴見における場合，彼の政治哲学としてのアナキズムの問題に他ならない。そして，それはすなわち，転向研究の方法の一番深いところにある価値観でもある。高畠によれば，鶴見はハーバード大学卒業の直前に，アナキストとしてアメリカで投獄されて以来，1970年代日本で内ゲバリンチ事件に直面しながら「方法としてのアナキズム」（鶴見，1975c）を書く今日まで，一貫して思想としてのアナキズムをゆるがせたことはない。それは必ずしも，特定の政治主張やプログラムをもったイデオロギーとしての意味においてではない。鶴見におけるアナキズムとは，むしろ，理想や気質，方法や感性の域に属する。しかし，そのことは，彼の価値観の根底に，あらゆる権力からの抵抗と自立という感覚が流れていることを意味する。それはいわば，転向

研究の前提ともいうべきものなのだ，と高畠は強調する（高畠 1975，485）。同感である。鶴見の情熱はそこにあると思われる。

Ⅳ　転向の遺産

鶴見にしたがって，転向の遺産という角度から転向の問題を考えてみたい。

鶴見によれば，転向というものには，ある思想に入るときと出るときとの動機の相似という問題があるという。すなわち，ある思想への入り方と出方が似ている。型が似ている。個人においても似ている。集団の傾向として考えてみると，1940年におこった集団大転向のかたちと，1945年，敗戦以後の占領という体制の下でおこった集団転向のかたちは似ている。（中略）それからもう一つ。1960年代からおこった高度成長というかたちは，また実に似ている。1960年から現在（1981年）までおこっている現象。それは，強制力が，今度は占領というかたちでもないし，天皇制権力によって警察にひっぱられていくとか，拷問を受けるとか，そういうものではない。超高層ビルが建ち，ハイウェイができる，歩く道がなくなって歩道橋を渡っていかなければならない，そういう環境そのものの変化が一つの強制力になって思想にたいしてはたらく。（中略）1960年代以後の強制力は，金鏡無欠の国体がわからぬのかとか，教育勅語を暗誦できないからぶんなぐる，そんなことは関係ない。ピッカピカの道路を歩く，その道路を突っきらないで，歩道橋を当然のことのようにあがってむこうにいく。うちでテレビをすわって見ていられる。そのことが思想にたいする影響力になっていく。だからその手段はちがうけれど，1940年，45年，60年，各時代は愛似た一つの型をなしている。集団転向として似ている（鶴見 1981，74-6）。

鶴見によれば，知識人の場合でみてみると，清水幾太郎や江藤淳は，顕著なしかたで1960年安保以後変わった人になる。清水幾太郎は，1960年安保闘争のとき，言論界のもっとも活躍した知識人の１人だった。国会突入をはかる全学連を支援して，支援をちゅうちょするグループを激しく攻撃するというやり方をとった。「いまこそ国会へ」と叫び，反代々木系の急進主義の最高の指導者だった（同，76）。

清水は，安保の後，香山健一などと新しい急進主義の根拠を研究する「現代思想研究会」をつくってからしばらく沈黙する。研究会を解散してからだんだん変わっていき，治安維持法の時代にも自由があったとか，紀元節を復活せよとか，今度は核兵器を日本国家はもつべきだとか，いいだすようになる(76-7)。

以上の鶴見の指摘に関して，その当時の清水の言説はどのようになっていたのか，一部分であるが，参考までに，ここで，清水幾太郎の著書『戦後を疑う』(清水，1980）を筆者なりに要約してみたい。清水によれば，「この終りかけているように感じられる時代は，これを何と呼ぶべきか。私は，この時代の一面を捕えて，これに『啓蒙時代』という名を与えてよいのではないかと密かに考えております」(清水 1980，57)。

清水は，啓蒙思想の特色として２点をあげる。第１点は，理性ないし科学の崇拝と，歴史の軽蔑との結合。第２点は人間性善説と制度批判の結合である。そして，賢明な人たちは上記２点が，日本の戦後思想の二大公理だということに気付くはずであるという。そこから，清水は次のように締めくくる。すなわち，戦後日本の二大公理は，治安維持法への復讐の心理から生まれた。同時にかつての転向が恥辱となり，非転向が勲章のようになった（同，57-9）とする。換言すれば，「60年安保」後，また転向した清水らしい見解の表明である。

筆者としてコメントさせてもらえば，清水幾太郎は戦前にも戦後にも転向したことで有名である。そこの本質は何か，そこの過程はどうなっているのか，鶴見俊輔との関係なども考察することは大事なことだと思われる。

以下においては，『鶴見俊輔 対談，編集　語り継ぐ戦後史』（上）（鶴見，1975d）をベースにして，清水と鶴見の対談を検討してみよう。なお対談が行なわれたのは（1968・6）と記されている。

清水　大学を1931年にでて33年に研究室をはなれて，無職になって筆１本で食べていくような生活になるんですが，そこでいろいろなアルバイトをした。その一つに“子供の育てかた”というのがあって，その頃，チャイルド・ケアーなんてのをまじめにやっていたのはアメリカだけだったでしょう，おそ

らく……それのパンフレットなんかもでてまして，それを日本の母親たちに知らせなければ，というようなわけで，ぼくは我流で英語をやったのですよ。（中略）そんなことをやってみると，子供の命は大切なんだから，当然そこには，むこうの生理学とか心理学の成果が集ってるわけです。科学的な成果というものだけでなく，人間というものに対するある観方というものがでてるんですね。そこで人間への眼が開かれたころがあります。それじゃあというので，生物学とか心理学とかを一生懸命になって読んでたわけね，その終点がデューイじゃないかな。いろいろな諸科学の中にあらわれている人間のつかみ方の一般理論として，ぼくには『人間性と行為』（デュウイー，1951）という本が現われてきた。（後略）。

鶴見　ニューディールの中では“よりよいアメリカ”という考え方があると思うんですが，戦争が終わったときには，どういうふうに考えられましたか。

清水　そういう点では単純なんだな。言いかえれば，そういう思想的な問題というものと，国と国が戦って一方が勝ち一方が敗けるということとは，あまり関係がないことだと思うんですよ。戦争が終ったとき，万歳を叫んだとよく言うけど，ぼくはワアワア泣いたなあ。

鶴見　そうですか，それはおもしろいですねえ。

清水　おもしろいかなあ，ぼくはちっともおもしろくない。

鶴見　私は無感動だったな。悲しくも嬉しくもなかった。なんというか不愉快だった。それだけだった。

清水　それはまあ，いろんな事情がちがったでしょうから……。

鶴見　そうですかねえ……。その悲しさというのは，日本が敗けたからですか？

清水　敗けたからっていうか，だって，あなたそう言うけどねえ，じつにたくさん……ぼくはまあビルマに行ってますが，ぼくは一人の徴用員にすぎなかったけど，しかし，その前線と銃後をとわず，これだけ巨大な費えというか……いろんなものが全てむなしくなっていく……（中略），その最後の計算をしなけりゃならないというのが敗戦ということでしょ。（中略）いろん

な人の話に，これで日本がよくなるといって，喜びの声をあげたというのがあるし，そういう人がいるってことも可能だけれど，ぼくの場合はぜんぜん違っていた。

鶴見　いやあ，それは意外だ。やはりそれは清水さんのパースナリティの根源的なものでしょうね。

清水　根源的かどうかわからないけれど，実に自然なものでしたね。

清水　二十世紀研究所が法的にも正式に発足するのは，昭和21年２月28日です。

鶴見　あれは海軍に行っておられた仲間が主体ではなかったですか？　宮城音弥さんから聞いたんですが，海軍のなにかの研究所に，中野好夫氏と清水さん宮城さんなどが，たくさん徴用されていて，そこで雑談してた仲間があって，その人たちがずっとひっぱっていたようなことでしたが……。

清水　いろんな人がいましたねえ。中野好夫さんもいましたし，坂西志保，渡辺一夫，大河内一男……いわゆる文化人といわれる人は殆どみんなきていました。

鶴見　人を集めたときの規準というか条件というのはどういうものだったのですか。

清水　なるべく景気がよくて，あまりブラないような，気楽に話ができるような…（中略）…そんな人にしようと思いましたね，そして若い人。

鶴見　二十世紀という名前はどこからおもいつかれたんですか。私がはじめて清水さんのものを読んだのは戦前に二十世紀叢書というのがあったでしょ。それに清水さんと新明正道，今田恵，大道安次郎というような人が書いていた。F・C・S・シラーのことなんか書いておられなかったかしら。あまり人が書かないことを書いておられるので，私は愛読しましたよ。昭和15年くらいかな。とにかくあのころの哲学の本で，わかることが書いてあるのは珍らしいんだ。（笑）影響を受けましたよ。あの二十世紀ということが頭の中にあったのですか。

清水　いや，とにかく大きな名前をつけようというわけで，ふと，二十世紀というのをおもいついたのです。（後略）。

清水　日本を滅ぼしたのは，東京帝国大学と陸軍大学であるという，戦争直後の空気が関連したのかどうか，今から考えると不思議ですが，二十世紀研究所には，ちゃんとした大人で，ちゃんとした学歴のある人がずいぶん来たのです。そんな時期がありましたね。２つの面があったんだ。これは，なぜ研究所をやめることになったかということになるんだけど，１つは，初めの資金が100万円で，半分を手つかずの基金にして，あとの50万で運営していたんです。あのころはすごいインフレ時代で，13人の事務員の給料だけでも大変だったんだけど，講師の先生がたには，当時としてはかなり多額のお礼をして，まあ盛会だったんですよ。そうしているうち，白日書院から，諸先生の話を本にするということになって何冊か作った。それがわりに好評だったのです。（中略）そのうちにうんと売れると，研究所がピンハネをやって清水が私腹を肥やしているという人が現われてきたんですね。（中略）当時はもういや気がさしちゃって……。もう一つは，聴講者がしだいにへっていったことですね。はじめのころは講習会的なものを開いて，おすなおすなの超満員だったのですが……。

清水　最後は専修大学の講堂だったな。よく憶えていますよ。申し込み者が３名くらいでね。もっともそれまでも申し込み者がそのくらいでも，当日になると何百人と集まることも珍しくなかったわけで，いくらか多寡をくくっていたんですが，当日になっても４人くらい。先生はもう来ちゃってね，もうどうしようもなかった。それが最後。その時には管理人にたのんで人工的に停電にしてもらって，きりぬけた。

鶴見　いつごろですか。

清水　昭和23年ころですね（鶴見 1975d，370-6）。

以上，清水と鶴見の対談では，戦後日本における２人の回想が語られている。戦争が終ったとき，清水がワアワア泣いたことを，鶴見がそれを清水のパースナリティの根源的なものと評するところがポイントであると言えないだろうか。続いて清水が「二十世紀研究所」を主宰した頃のことを，同時期，『思想の科学』を立ち上げた鶴見がいろいろ聞くところも興味深い。両者の

行動と思考の相違がよく現れていたと筆者は観察した。

さて，清水の次の仕事は平和問題談話会であった。平和問題談話会こそ，清水が戦後に再度転向する出発点となる場所であった。２人の対話をさらに追跡してみたい。

鶴見　平和問題談話会は，どういうふうにしてできたんですか。（後略）。

清水　いま自発的に絶版にしている本で，岩波新書の『ジャーナリズム』（清水，1992）というのがありますが，あれを伊豆山の岩波の別荘で書いていたんです。あれが昭和23年の９月くらいじゃなかったでしょうか。そこへ吉野源三郎氏が東京から現れて，２人で海岸を歩いたんだなあ，とてもロマンチックな話なんだけれど，吉野氏がタイプ用紙２，３枚のものをぼくにわたして，それを月の光で読んだ記憶がある。それが「世界の社会科学者より戦争の原因について」のテキストなんです。（中略）こういうことが日本でできないだろうか，というのが吉野氏の考えで，ぼくはできるだろうと思って，むずかしいだろうけれどやるに値する，と答えたんですよ。やはり年長の方が中心になられる方がいいだろうというわけで，吉野氏を非常に信頼している安倍能成さんを立てて，その介添役になったのが大内兵衛さんと仁科芳雄さんでしたね。

鶴見　ずいぶん大世帯でしたが，私の印象では保守的自由主義者もだいぶ入っていましたねえ。和辻哲郎，田中美智太郎，鈴木大拙，田中耕太郎……。

清水　天野さん。

鶴見　そうそう天野貞祐。いまからならちょっと考えられないですね。それに，一度話をさせられたときに感じたのですが，和辻さんが前におられて積極的に反応されましたね，ただお座なりに来てるという感じじゃないんだ。

清水　そうですよ。ああいう年輩の方々が政治的立場を別にして，とても熱心でした。ぼくは終始，書記局のようなことをやることになりまして，東京だけでもいろんな派がある上に，京都にいくと京都には，派があるだけでなく東京に対する何かがある，というふうで，何かを決めようとすると，東京での合意をもってぼくは京都にいき，そこでまた説明するというようなことで，

なかなかたいへんでしたね。

鶴見　それからだんだん人たちはなだらかになってくるんだけど，清水さんだけは，二段階ロケットみたいにずっと先にでて，私の頭にのこっているのは砂川の基地問題で，文化人基地問題談話会とかってのがあったでしょ。その文化人なるものも行った。（後略）。

鶴見　平和問題談話会のときよりもずっと前にでて，ひっぱっておられたような感じだったが，たしか黒田秀俊さんが事務局長だった。

清水　ぼくは，談話会を始めるまでは，評論家というか，いくらか学問の好きなジャーナリストとして生きてきたし，生きていこうと思っていたから，政治的なことについて全く発言しないというわけじゃないが，ちょっと距離をおいておくようなところがあったんだけど，談話会をやってみるとね――つまり，こういうことだったんだ。さんざん議論したあげくに，昭和23年の12月12日に当時の憲法記念館，いまの明治記念館で東西最初の総会を開いたわけ。（中略）それが当日になって吉野源三郎氏が「今日は声明を出すことになる。きのう何か清水さん書いたでしょ，それを声明として読みあげろ」というんだ。（中略）するとおもしろいもんでねえ，短い時間だけど自分がまとめたというか，軍事基地反対とかなんとか自分がそれを書き，みんなの前でディフェンドしたわけでしょ。すると，それを聞いて賛成した人と，心の中に持つ重さがちがうんですね。だから，自分が書き，そしてみんなの批判に対して擁護したということで，その声明のエムボディメントみたいに，なっちゃたわけでしょうね。（中略）だから，軍事基地に反対するんだ，といえば，それは反対する以外ないのよね。それともう一つは，国家公務員が多かったんだ。それで，明らかに政治的な問題については行動の範囲がせまかった。ぼくはそのときはまだ大学の教師でさえなかった。学習院は，そういう安倍能成院長との交渉の結果として昭和24年の４月から勤めることになったんですよ。

鶴見　それから安保のときも，非常に早くからとりくまれたじゃないですか。「諸組織への要請」を書かれたのは，激突のだいぶ前でしたねえ。

清水　1960年の２月でしたねえ。

鶴見　あの前の年に学生が国会に入りましたね。あのあたりから学生の気分とは密接だったんじゃないですか。そういうところは，安保問題研究会の学者の人たちとはずいぶん気分的な基礎が違ってたでしょうね。

清水　違ってましたね。実は安保年代といわれる学者文化人の間での，1960年の安保に対する対策の出発というのは，1957年じゃないですか，ずいぶん早いんですよ。（中略）だけど安保というのは最高に政治的な問題で，政治的なことは労働者の中に直接にはなかなか入らないわけ。（中略）当時もそう書いたし，今もそう思っているんだけれど，安保が大変な問題だということを，多くの人に気づかせたのは，あの学生の荒っぽい動き方なんですね。

鶴見　それは私もそう思います。

清水　もう一つは1960年１月16日の羽田闘争ですね。それが例の“幅広い運動”を代表する代々木を中心とする諸組織からは，しばしば岸内閣以上の敵にみたてられるようなことになって，あの「諸組織への要請」を書いたんです（鶴見 1975d，376-82）。。

ここで，いったん，清水の言う「諸組織への要請」にあたってみたい。これは清水の著作集には収められていない。おそらく17名の共同宣言（1960年２月15日）的な形式をとっているからであろう。なお，「諸組織への要請」は「諸組織への要望」の，鶴見・清水の記憶違いであろう。

さて，「諸組織への要望」は，次のように書かれている。抜粋して紹介しよう。

「私たちの反対にもかかわらず，ついに日米新安保条約の調印が行なわれました。（中略）しかし，調印は行なわれましたけれども，元来，調印は政府の一方的行為として可能であり，これに対して，批准は国民の見識と決意とを通して行なわるべきものであります。政府の仕事が終ったところから，国民の仕事は本当に始まるのでありまして，私たちの新安保条約反対運動は，今こそ本格的な段階に入るものと考えられます。（中略）去る11月27日の『国会乱入』などは，このエネルギーの爆発の一つにほかなりません。多く

の報道機関が，一方，この事件に烈しい非難を加えながらも，他方，新安保条約の内容ならびに岸首相の渡米に極めて批判的な態度をとっておりますのも，或る程度まで，こうしたエネルギーの増大に気づいている故でありましょう。（中略）しかし，率直にいって，最も憂慮に堪えないのは，この広汎かつ強烈なエネルギーを有効に組織する政治的指導性が欠けているように見える点であります。（中略）とりわけ，１月16日の羽田への全国大衆行動の抑圧において明らかであります。有力な諸組織の諸組織の指導部は，増大する全国民的エネルギーに向かって「……をするな」と説くことのみ多く，エネルギーに適合した方法で「……をしよう」と呼びかけてはいないようです。そして，そこから生じた爆発的結果については，大切な味方である勢力に非難を浴びせるのみであって，かえって，広汎な戦線に分裂を招いているように思われます。（中略）この地点に立って，私たちは，新安保条約に反対する多くの組織が，全国民的なエネルギーを剰すところなく吸い上げて，これを真に生かしきるような方向へ新しい一歩を踏み出してくれることを心から願うものであります」（阿部ほか 1960，273-6）。

あまりにも引用が多すぎたので，一言コメントしたい。筆者（土倉）のような後世の者から観察すると，知識人からのこの声明は，世論に訴えるにしては，いささかバランスを欠いていると思われる。清水幾太郎のその後の「転向」を予見させるような，危ない文書になっているように思えてならない。

鶴見　６月18日の自然承認というのがピークなんですが，あのときに「もうこれほどのことはおこるまい，今の状況というものになぜもっとくい込んでやれなかったか」という意味のことを言われてましたね。それは戦後の総決算という感じでしたね。

清水　そうでした。しかし終始，安保条約が破棄できるかどうかということについては自信がなかったな，おそらくできないだろうとは思っていたね。（後略）。

鶴見　あのあと現代思想研究会をつくられるんですね。私は鬱病になって１年

半仕事ができずにいて，何もお手伝いできなくて申しわけなかったんですけれども，それで，その頃に清水さんが考えておられたことはぜんぜん知らないんですが，吉本隆明氏に聞くと，清水さんの気持ちはよく分かると言うんだ。

清水　あの人はわかってくれるでしょうね。

鶴見　私はあのころからお会いしてもいないし，状況に通じていないんですけど，あのあと『精神の離陸』（清水，1965）というのを書かれますね。あれは私はびっくりしたんですが，あの間にあったことというのは，これ（『現代思想』（清水，1966））を読んで，ある種の根拠があるってことはわかりますが，しかし，日本の時代に対する反応としてはどういうことだったのかな。

清水　よくわかんないな。正直に言って二十世紀研究所で得た友達を，平和問題談話会をやってく過程で失ないましたね。談話会では一種の狂信的独走みたいなことをやって，談話会の中でのぼくと条件のちがう人との距離ができてしまったし，安保の最後の過程で，談話会で得た実に多くの人たちをまた失なったですね。その安保でおさまらない気持ちのうさ晴らしというか，そんなものをやらないではいられない気持になった。（中略）ぼくはいろんな総合雑誌と，長い間にかなり深い関係に入っていたんだけど，まれなケースをのぞくと，そういう雑誌との縁が一度に切れるわけですよね。ですからその，気持を表現したいということと，もう一度いろんなことを勉強したいということで，「現代思想研究会」をはじめたんです。あの年の秋からでしたから，安保のあとで始まったと言ってもいでしょう。雑誌は８号くらいしかでてないでしょう。だけど時間は１年くらいかかって，終ったわけですね（鶴見 同，382-83）。

清水　その間の研究会にでてた人がほとんど近代派というんでしょうか，そうなっていったんですね。それはしかし，ぼくが指導したのでも希望したのでもないんで，なぜそうなったかというのは，そうなった人が言えばいいんで，ぼくが代弁する気はないんだけど，ぼく自身についてだけ言えば，つまり，それまでの時期が非常に無理してたわけなんだよね。出身というか根が，育

児法てなところから入っているでしょ。それならそれだけやってればいいじゃないかといわれるかも知れないが，ユネスコの声明にめぐり会ったのが運のつきみたいなことで，一生懸命に声明を書くというようなことになり，（中略）誰よりも無遠慮に運動の中に飛び込んでいくというようなことになって，ということになると，西をむいてもだめだから東をむいてみただけよ，ということになるのかも知れないが，西をむいても東をむいてもマルクス主義者ばかりなのよ。（中略）自分はマルクス主義者でも共産主義者でもないということはわかり切っているつもりでも，運動というものをやってくと，やはり赤旗の下でやる以外に活動の場がないわけね。共産党の野坂といっしょに出るということが，運動の上からは必要になってくるわけね。（中略）安保が終ってみると，やはり身分不相応なことをやってたなあという気がするし，思想的な意味でも……安保の運動の中で仲間に対していちばん腹がたったのは，やはり人民戦線方式というか，幅広く，神を信じたものも信じなかったものもとやらいう，あれには終始腹が立って……ですからそういうものを，いろんな勉強の過程で自分の気持を無理しないで整理しよう，ということになると，いままでおさえ遠慮していたことが，一度にワーとでちゃう…というのがナチュラルヒストリーですかねえ。

鶴見　自分の位置を，運動家としての位置からひきあげたわけですね。すると言いたいことが言えるようになって，言いたいことを体系としてまとめる，ということですね。

清水　そのとおりです（384-5）。

鶴見　安保以後，いま，というのをどういうふうにみられていますか。未来学なんてのがすごい流行になってきたけど。未来学というのもひとつのイデオロギーだと思うんですがね。なんというか，ある種の気分と密着していますね，現代感覚として。

清水　ぼくは，未来というのは，現状をコントロールするための観念だ，と思うんですよ。未来というのは，イグジストしないもので，多少きどっていえば無みたいなもので。

鶴見　「未来を発明する」という言葉が引用してありますが。

清水　未来学というのがあるのかどうか知らないけれど，それがさいきんかなり実体化されているような気がするんですね。現状をコントロールするためのアイデアで，人間が支えていなければいけないもの，とぼくは思っているんですが，その未来が，ガンと，しかも明るくイグジストするようで，逆にそこからの光で現在をみるような傾向……つまり，未来が，かつて摂理や歴史的大法則が占めていた座につきそうですね。つきそうな危険がかなりあると思う。

鶴見　なんとなく，未来学というのは，エスカレーターにのって書かれている感じがしますね（385-6）。

以上のようにして，清水の戦後転向の一端を垣間見たわけであるが，ここで趣向を変えて，安保闘争当時，清水のパートナーともいえるグループであった全学連ブント派の一人の活動家であった西部邁を取り上げてみたい。政治学者中島岳志は，彼の新刊の好著（中島，2022）で，西部について，以下のように評価している。

中島によれば，日本でスペインの哲学者ホセ・オルテガ・イ・ガセットの存在にスポットライトを当てたのは，西部であったという。また，中島にとって，西部は，さまざまなことを学んだ師匠のような存在だったという（中島 2022，134）。

中島によれば，「自民族中心の思潮」，それこそが，大衆化，大衆主義の典型であるというのが西部の考えだった。安易に大衆社会の中で「日本」を礼賛し，「ジャパン・アズ・ナンバーワン」と浮かれている人間を軽蔑していた（同，137）。

西部がこうした考えを持つに至ったのには，若いころの経験が関係している，と中島は言う。すなわち，西部は大学時代60年安保を闘った左翼の闘士だった。そのことに対する反省的まなざしを常に強く持ち続け，運動から足を洗ったあとも，「近代主義的な観念から自分はながく離れられなかった」と語っていたと中島は回想する（138）。

西部は，その後，大学院で数理経済学を専攻する。専門の研究が評価され，東京大学の教授までなるが，途中で自分の学問を徹底的に疑い始める。そして，「こんなことで世界が分かるわけはない」と言って，数理経済の研究を投げ出してしまう（同）。

そして，政治学から文化人類学，心理学に至るまで，あらゆる分野の本に目を通し，「狂ったように」勉強をはじめた。その後，アメリカ，イギリスに留学。そのイギリスで，西部は保守思想の真髄に出会う。イギリスの農村部で生活し，何百年も続いてきたであろう庶民の豊かな日常，受け継がれてきた祭りの様子

などをみるうちに，「これこそが人間だ」と感じ，バークなどの著作を読み始めた。彼が30代後半のときのことだった（139）。

日本に帰ってきた西部が目にしたのは，自己懐疑の精神を失った大衆が権力を掌握する「高度大衆社会」だった。その中で，西部は自ら「保守」を選び取り，オルテガを語りながら，現代日本，とりわけ1980年代の右傾化と言われる現象に対して強く批判を続けた。そして『大衆への反逆』（西部，1983）が書かれた（同）。

中島によれば，西部は1988年に東大教授を辞職する。彼はオルテガと同じく「輪転機の上に立って」，大学を去り，自分で雑誌を立ち上げた（140）。

私見では，清水幾太郎の戦後における転向に引けを取らない，もう一つの戦後転向の例を見ることができると考えるのだが，以下においては，彼自身の自伝的なメッセージにあたってみたい。

西部は1986年に刊行された自著『六〇年安保　センチメンタル・ジャーニー』（西部，1986）の「序章　空虚な祭典」を，こう書きはじめる。

「25年前のちょうど今頃，ブントという政治組織が，その短命の生涯における，最初にして最後の昂揚をむかえようとしていた。ブントというのは“同盟”ということを意味する独逸語で，共産主義者同盟の略称である。1960年の４月から６月にかけ，いわゆる60年安保闘争が大きく激しく渦巻くなかで，ブントは過激派の青年たちを率いて警官隊との衝突をくりかえしていたのである。

全学連主流派のひきおこした一連の騒擾がそれである」（西部 1986，15）。

25年も経って振り返るのだから，さすがに西部の筆は冷めている。西部は安保反対陣営の勢力配置を次のように描く。

60年安保闘争は，戦後思潮の終焉を刻む儀式になるとも知らずに出来事の推移が企画されているという意味での，キャンペインにおおよそ終始した。国民会議に関与する諸党派・諸組織のつくった企画は総じて静謐を旨としており，祭りの賑やかさをかもしだすのがせいぜいであった。60年の奇妙さはそのような牧歌的な雰囲気のなかで歴史の大きな歯車が回ったというところにある。共産党はその暴力の鉾先を，少なくとも対権力闘争に関するかぎり，５年もまえに収めていた。新左翼は共産党からのようやく開始したばかりの段階で，暴力をまだ手にしてはいなかった。（中略）しかし，ブントおよびその影響下にあった全学連主流派の先鋭な部分は暴力への志向を，おおむね観念の領域にとどまりながらも，執拗に追求していたのである（同，18-9）。

ブントに対する西部の評価は甘くはない。もう少し西部の文章を引用しよう。

いったいブントはなにを信じていたのか。ほとんどなにものをも信じていないという点で，ブントほど愚かしくも傲慢な組織は他に例がない。（中略）要するに信じるに価するものを獲得していなかったのである。（中略）彼らがかろうじて信じることができたのは，戦後思潮のなかに，（中略）様々の魔語によって操られる言語空間のなかに虚偽や欺瞞が充満しているという感覚であった。その感覚にはたしかな経験の裏づけがあったのである。なぜといって，ブントはその言語空間のなかで育った人間たちを主要な構成員としていたのだからである。ということは，自己のうちにも虚偽や欺瞞がふんだんにあると察知するということである。（中略）ブントの過激さとは，２年近くの短い期間であったとはいえ，革命を幻想と知りつつ幻想してみた軽率さのことであり，そして軽率を一種の美徳とみなした腰の軽さのことである。つまりブントとは一個の滑稽にほかならない（20-2）。

このあたりで，西部言説の紹介を終えたい。筆者としては，清水と同じく西部も「転向」だと言ってもよいのではないかと思うのだが，西部の場合は「卒

業」というべきかもしれない。

V　おわりに

「転向」の問題はむずかしい。簡単に言えば，戦時期日本と21世紀の日本では，「転向」の様相が違うだけでなく，本質的に違うのではないかと思われる。

また，「転向」の問題は世界的な問題であるとして，例えば，フランス第５共和制下における，ある思想家の「転向」という問題には筆者の場合食指が動かない。転向研究の御本尊である鶴見俊輔のお叱りを買うかもしれないが，「転向」研究はあくまで日本製に限るのではないか，というのが現在の心境である。

参考文献

阿部知二ほか（1962）「諸組織への要望」，『戦後学生運動：資料』第５巻，三一書房，273-6 頁。

思想の科学研究会編（1959），『転向：共同研究』上巻，平凡社。

――――（1960），――中巻，――。

――――（1962），――下巻，――。

島木健作（1955），『生活の探求』，『現代日本文学全集』第46巻，武田麟太郎，島木健作，高見順集，筑摩書房。

清水幾太郎（1949），『ジャーナリズム』，岩波新書。

――――（1965），『精神の離陸』，竹内書店。

――――（1966），『現代思想』上・下，岩波全書。

――――（1980），『戦後を疑う』，講談社。

高畠通敏（1975），「解説」，鶴見，後掲書，477-86頁。

鶴見俊輔（1975a），『鶴見俊輔著作集』２．思想Ⅰ，筑摩書房。

――――（1975b），「転向の共同研究について」，――――，3-28頁。

――――（1975c），「方法としてのアナキズム」，『鶴見俊輔著作集』３．思想２，筑摩書房，387-401頁。

――――（1975d），『鶴見俊輔 対談，編集　語り継ぐ戦後史』（上），講談社文庫。

――――（1979），「戦後民主主義が消えたあとに」－『わが生活　わが思想』を読んで－」，雑誌『本の窓』（小学館），５月号。

――――（1981），『戦後思想三話』，ミネルヴァ書房。

――――（1982），『戦時期日本の精神史』，岩波書店。

――――（1991），「戦後民主主義が消えたあとに」－『わが生活　わが思想』を読んで－」，『鶴見俊輔集』第９巻，『方法としてのアナキズム』，筑摩書房，398-400頁。
――――（1997a），『期待と回想』上巻，晶文社。
――――（1997b），――下巻，――。
――――・上野千鶴子・小熊英二（2004），『戦争が遺したもの：鶴見俊輔に戦後世代が聞く』，新曜社。
デュウイー，ジョン（東宮隆訳）（1951），『人間性と行為：社会心理学序説』春秋社。
中島岳志（2022），『オルテガ　大衆の反逆～真のリベラルを取り戻せ』，NHK 出版。
中野重治（1960），『むらぎも』，新潮社。
西部邁（1983）『大衆への反逆』，文藝春秋。
――――（1986），『六〇年安保　センチメンタル・ジャーニー』，文藝春秋。
林　達夫（1951），『共産主義的人間』，月曜書房。
森崎和江（1984）『慶州は母の呼び声――わが原郷――』，新潮社。
吉本隆明（2021），「甦えるヴェイユ」，『吉本隆明全集』第25巻，晶文社，10-135頁。